

教室だより

近世史部

今回、私達は近世史クラスとしてのゼミ活動の成果を一つの論文にすることができず、皆様の御期待に添えませんことを深く御詫び申し上げます。

本年度は、当初、近世農民生活史という書物を用いて二・三年生を中心にゼミを行い、それを基に五人組制度の地域的分析をする予定でしたが、古文書を始めた史料が手に入らなかったため、話し合いの結果、学内ゼミに向けて米騒動の津市における実態を探究することになりました。しかし、部落問題が深く関係してきて、既存の資料以外に資料を発掘することは困難で、再び行き詰まった次第です。ところが、折しも、教科書検定問題が国際的な波及を示し、クラス員の中に日本の侵略の事実を皆で考える絶好の機会ではなからうかという雰囲気が高まってきました。そこで、現在は、国内政治・経済・植民地国の状態の三班に一・二・三年生全員が分かれて、今我々の身近に迫ったこの問題と真剣に取り組んでいる最中です。歴研、そして来年度のふびとへ向けて、努力を続けていきたいと思っています。

また、私達、近世史クラス員一同、皆様から御助言いただけたら幸いと思っております。

古代史部

私たち原始古代史部会では四月に一年生五人が仲間入りし、にぎやかさをいっそう増しています。近世史部会と新歓合宿や大学祭のみこしを合同で行なったり、ソフトボール大会などを催し、交流を深めています。

今年はクラス全体で歴史教育ゼミを行なっています。これは授業実践記録を検討、討論し、歴史教育についての自分の考え方を見つけようというものです。教師を目指している私たちにとって意義のあるゼミであると考えています。

また、考古学ゼミでは夏休みに熊野市の依頼を受けて津ノ森遺跡の発掘を行い、現在その整理作業を行なっています。昨年からの取り組んでいる上野荒木車塚古墳の測量もあとわずかで終了し、その後周辺の踏査を行なうことも考えられています。

このように、クラス全体の歴史教育ゼミと従来からの考古学ゼミが、それぞれの場で研究活動を行なっています。そして、今年有志が集まり、新たに教育ゼミができました。今、原始古代史部会は自ら学んでいこうという意欲に満ちています。

西洋史部

私たち西洋史部は、アメリカ班・ドイツ班・イギリス班の三つに分かれ、それぞれ独自の研究を行なっておりますが、最近ほぼ毎週の研究会においてそれぞれの発表がもたれ、討論しあっています。

今年には豊永先生がドイツ留学よりもどられ、ドイツ班ではさらに研究熱が増しているようで、各自、一層の研究活動がみられるようです。クラス活動については、ええんとちゃうかという意見がきかれますが、学年ごとのつながりは一部をのぞいて強いと思いますが、縦の関係においては、交流は非常にさかんではあるけれど、縦の関係本来の意味ではどうかという率直な意見もきかれます。しかし、このクラスは、東洋史部設立以来ゼミ室を共にしているため、クラス活動に関して、西洋史部だけに限ってこれを書くのは非常にむづかしいことで、それだけ互いに一体となってクラス活動を行い、史部のへだたりは研究活動をのぞいては何もないといえると思います。クラスのゼミ室の雰囲気も明るく、活気があります。今後、私たち西洋史部は、さらにまた一回り大きくなることは、まちがいありません。

東洋史部

私たち東洋史部は、現在北村先生と十二名の学生とで構成され、歴史クラスの中では最も歴史の浅い、フレッシュな史部です。昨年は北村先生がイギリスへ留学され、そのため研究発表会その他の活動も停滞するという事態に陥りました。私たち学生だけでは実際に何もできないんだということを思い知らされたわけです。しかし、昨年九月に北村先生が帰られてから東洋史部にも再び活気が取り戻されようとしています。

これまで東洋史といえ、西洋史や日本史に比べてどちらかとい

えば地味で、あまり人の関心をひかない学問であったと思います。しかし、東洋特に中国は、わが国とは二〇〇〇年近くのつき合いがあり、日本の歴史を考えるうえで無視することのできないものをもっています。近年中国との交流が再び盛んになり、中国に対する関心も年々高まりつつあるようです。そういう意味でも、東洋史というのはこれから飛躍的に発展する可能性を秘めた学問であると思います。私たち東洋史部は、その発展にほんの僅かでも寄与することができればと決意を新たにしている次第です。

北村先生を迎え、他のクラスに負けない団結力と若さをフルに発揮して、これからもさらに前進していくつもりです。